【第２部】パネルディスカッション

「魅力ある通り、魅力ある青葉通をつくっていくには」

【コーディネーター】

堀　　繁　　（東京大学アジア生物資源環境研究センター長・教授）

【パネリスト】

庄子　直　　（青葉通まちづくり協議会事務局、
（株）藤崎・執行役員総務部担当部長兼ＣＳＲ室担当部長）

不破　正仁　（東北工業大学工学部建築学科・講師）

佐々木　啓子（西公園プレーパークの会・プレーリーダー）

岩間　友希　（（株）伊達の家守舎・代表
（株）都市設計・ディレクター）

○堀　早速、パネルディスカッションに入りたいと思います。

まず、この４人の方に自己紹介を兼ねて問題提起をしていただきたいと思います。

○庄子　青葉通まちづくり協議会の事務局をやっております庄子と申します。

この協議会の内容を簡単にご説明申し上げます。

協議会は、平成２４年、震災後の設立です。青葉通も戦後、仙台空襲で焼け野原になった仙台のまちの復興のためにできた通りです。震災後に青葉通まちづくり協議会ができたというのも何かの縁で震災の復興にも役立てることができないかというのも協議会の設立の趣旨にも書いております。

構成員は、現在、会員数が３６団体、個人の方もいます。青葉通は企業や商店、住宅、マンションなど場所によってまちの様相、たたずまいが違っています。多面性があり、会員も多様な方がいらっしゃるため、私としては今後、おもしろい事ができるのではないかと思っています。

会として何か外に対して事業をする前に、お互いを知ろうという事で青葉通へ～へ～ウォーキングというイベントをしました。内容は、お互いの会員さんの会社やお店に入っていってそこの方のお話を聞いて、逆にへぇーと我々が納得するような、びっくりするようなお話を聞き出してお互いを知ろうというイベントです。

それから、青葉通ですからこの通りをつなぐのはケヤキだと考えております。地下鉄工事でいったん八木山に移植したケヤキの木がどのようになっているかを見に行きました。

堀先生の基調講演にもありました、毎年青葉まつりの時に開催している青葉通りカフェや、ヤナセさんで夕日を見る、屋上ピクニックも行いました。青葉山やお城も全部見渡せるような絶景の場所で大変人が集まったイベントでございます。

また、平成２７年の仙台国連防災世界会議が開催された際に、会員の皆さんと防災訓練を実施して海外の防災の担当の方に訓練を公開しました。私たちは震災を経験していますので防災、安全・安心なまちをつくっていこうというのも協議会の趣旨の一つになっています。

○不破　東北工業大学の不破です。

私の考え方を少しまとめてみました。

まず、私は授業で都市計画などの大きなテーマを担当しているのですが、地域に現存する小さなものが組み合わされることにより創出される“構成・空間”の存在が重要だと考え、“小さなものと風景をどのように結び付けていくのか”を考えて研究しています。

具体的には、学生たちと町並み、農村景観の調査、現存する建物自体の調査をして活用方法などを検討していますので、事例を２つ紹介します。

１つは“遺産の発見から価値の発見へ”ということで作成した「それゆけ！北野マップ」。まちを写真に撮るだけではなく、絵にかいてみる。それを繰り返すと、まちの見え方が変わってくる。地図づくりは、まちを知るきっかけ、他者と共有するためのツールであり、かつ、まちを楽しむ手法の１つになると考えています。

もう１つは、“まち歩きパスポート”です。

学生たちとまちを研究していく中で重要だと気付いたことがあります。それは、特徴あるまちの魅力や、そのまち自身の魅力を探そうというとき、そのまちならではのものではない、“ありふれた風景”の中に魅力や愛着を感じさせるものが多くあるんじゃないかということです。

こうやって作り上げた報告書を簡単にまとめパスポートとして子どもたちにも渡します。
子どもたちは喜びますし、地域の方、そして調査をする我々も含めみんながまちの良さを知ることになります。

まとめますと、やはりここに行きつくのですが、今何があるのか、今あるものは何であるのかということを知る。そういうことを調べることができるマンパワーを持っているのが大学だと思っていますので、一緒に地域の方たちと何か遊びを探したいというふうに思っています。これからは、目に見えない価値みたいなものに、我々が新たな価値を見出して、それを活用していくという時代になっているのではないかと思っています。

○佐々木　西公園プレーパークの会の佐々木と申します。私は仙台市の生まれなんですけれども、もう数歩行くと隣の市という田んぼや山の中で子ども時代を過ごしました。仙台に住んでいるんですけれども、「仙台に行く」と言うと定禅寺通とかこういう町並みの中に出てくることを指す言葉だった高校生時代を過ごしました。

現在、西公園で子どもの遊び場づくりプレーパークをしています。プレーパークは、“誰でもいつでもや

ってみたいことが思いきりできる”ことを目指した遊び場です。土や水で遊んだり木登りをしたり、都会の真ん中にある隠れた森の中でそれぞれ好きなことをして遊んでいます。

私は、プレーリーダー、今はプレーワーカーという形でも呼ばれるようになってきているんですけれども、そこで子どもが自由に伸び伸びと遊べて、大人がそれをゆったり子育てをしながら見守れるようにということでいます。現在は３人の子どもたちをその公園に集うお母さんたちと一緒に子育てしながらやっています。主に今はつながるという役割のほうを担っていまして、いろんな方とつながってきたら今日、ここに坐らせていただいたということになっています。よろしくお願いします。

○岩間　株式会社都市設計に所属しながら伊達の家守舎でも活動をしております岩間です。

今日はシンボルストリートというテーマがありますので、私が昨年から定禅寺通で取り組んでいる活動を中心に紹介しながら、私の自己紹介をいたします。

私は東京都町田市から仙台に参りました。２０代はずっと東京で働いておりまして、３０代を節目に地方で働く事に興味を持ち、人の縁やおいしい日本酒に出会いましてこちらに引っ越してきました。

仙台に来てからは、公共施設をつくるだけじゃなく、その中で過ごす人のコミュニティデザインやビジネスデザインへの必要性を感じ、それらを手掛ける部署を立ち上げまして仕事をしております。

昨年あたりから、仙台市でも“既にある空間、公共空間も含めて利活用を考えてみよう”という機運が高まっており、面白そうだなと思って共感して手を挙げました。その活動を通して不動産をお持ちの方との出会いもあり、昨年の春に、「定禅寺通に素敵な景色の屋上があるんだけど見に来てみない」ということでお声がかかり、連れていってもらいました。その当時は、まだ防水施工しかされていなくて、「いつかはここを見下ろせるようなテラスにしたいと思っていたんだよ」というオーナーさんのお話がつながり、それはいいですね、やりましょうよとなって作ったのが定禅寺通ヒルズルーフトップテラスというレンタルテラスです。つくってみたら人が集まったというのがありまして、一番最初は花火大会に間に合わせようということで、みんなで花火大会を屋上で見たらこれはプレミアムでしたね。

ここで言いたいのが、本当にここの立ち位置に立ったときに上と下ってつながっているんだなということをすごく感じたんですね。定禅寺通、上から見たら本当に素晴らしくて、東京なんか比にならないくらい素晴らしかったんです。春日町のほうまで緑がずっと川のように続いていて、感動としか言えないような景色だったんです。

また、定禅寺通の真ん中の遊歩道って法律上は公園の区分なんですね。緑がきれいなのでもっと使ったらという事でチャレンジイベントをしました。

ウッドデッキゾーンに飲食とかを提供できるお店のスペースを置き、かまどを置いて炊きたてのお米のお振る舞いなどをしました。県民会館の前のあたりではハンモックを用意したり、昆虫触れ

合いコーナーを用意して歩けるようなところを演出したという内容になっています。

いろいろやってみてわかった辛さと楽しさというものを糧にしながら、民間として今年は何をやっていこうかとか、将来の定禅寺通は、やっぱりもっと日常的に人が歩いている姿になったらいいなんていうことを思いながら活動しています。

○堀　ありがとうございました。４人の方に自己紹介を兼ねて普段考えておられること、あるいは今までやってきたことの発表をしていただきました。

まず最初の庄子さんは、青葉通の協議会のメンバーとしてさまざまな活動をされているというご紹介がありました。

まずは、まちを理解する、まちを知る、こういうことが大事だというお話があったかなと思います。

それと同時に、楽しむということ、それもやっておられましたよね。自分が参加して楽しみながら地域を理解する、こういう活動をされているということで、私は感心して聞いておりました。

続いて、不破さんは、さすが大学の先生ですね。調査を行い、データを集め、分析的にまちを理解するということをやっておられる。

しかし、やっていることとしては、やっぱり同じなんですよね。まちを理解することがまずは基本だと。理解することによって初めてどういう特徴を持っていてどんなところで何があって、我々はどうしたらいいのかという基本のスタート地点に立てると。それを少し学問的にやっておられるという話で、研究者仲間としては非常に興味深く聞かせていただきました。

続いて、佐々木さんはお子さんがいらっしゃるんですね。実践的に自分の子どもを遊ばせる、そういう場をつくる。それによってコミュニケーションが生まれ、人間同士の輪、多分お母さん同士の輪をつくっている。

我々人間というのは１人では生きられません。どうしても人と人との関係ということが大事になりますね。そういうことをつくること自体も、実はまちを楽しむ、まちに生きるということになるわけです。

最後の岩間さん、何か新しいものをつくるとかということでなくて、今ある、既にあるものをうまく生かして使い込むと、そういうことを特にやっておられる。イベント的なお話が今日はありましたけれども、恐らく必ずしもイベント的なことばかりではなくて、日常の生活の中で楽しく使うというようなことも、恐らく大分されてきたのではないかなと思います。

４人の話に共通することがありました。それは、１人も“ないものねだりの話がなかった”ということです。大抵これだけ集まると何かがないとか、あれが欲しいとか、これがないからここのまちはという話が必ず出るんです。そうじゃなくて、今ある“仙台”というまちをどういうふうに生かしていくのか、そのためにはまず理解しなきゃいけないし、そのためには関わっていろんなことをやってみなきゃいけないし。当然、その中で人間関係もつくっていかなければいけない。そうい

う皆さんのお話だったかと思います。

庄子さんがやっておられることって私、すごく共感が持てるんですけれども、これからその活動になるべく多くの人を巻き込んで、普遍的なものにしていきたいというお考えだと思うんです。今後、どういうふうに今までやっておられた活動を広げていこうとされておられるのか、特に市民との関係とか、その辺をお聞かせください。

○庄子　地下鉄工事が終わりを迎えようやく歩道が整備されましたので、これからそれこそ市民に対していろんな青葉通の価値を知らしめていったり、市民に楽しんでもらうようなまちをつくっていこうかなと思っています。

一つは、市民といかにうまく協働してやるかですが、開かれた形で市民の方々からいろんなご意見をいただいたりしてやっていきたいと考えています。

もう一つは、若い人、特に子どもたちをどういうふうに引っ張っていくかということを考えています。それをつなぐのは、やはりケヤキを単純に街路樹として見るんじゃなくて、環境の一部として捉えていくような運動なり、事業をやっていきたいなと考えています。それによってまちにいる方々により興味を持って参加していただけるような価値を作りたいです。

○堀　人を巻き込むということでしたら、岩間さん、得意分野なんじゃないですか。

こうやったら市民が共感しますよというのが何かあれば。

○岩間　決して得意ではないんですけれども、自分がやってみた経験から。それぞれの人に得意分野があるので、「私、無理です」ということを言いまくることかななんて思っています。私はイベント屋さんではありません。だから得意な絵を描いて、それを見せて「ちょっとやってみたくない？」と言うんです。「でも、私、できないから一緒にやろうよ」と。そう言っていろんな人を巻き込んでいきました。

実際にやってみると、それが形になってすごい良かったねと言う人が出てくる。定禅寺通でやってみたことで全くつながりのなかった高校生から「あそこでイベントをやっていた岩間さんという方に会いたいです。私、定禅寺通、大好きなんです」と連絡があったんです。

○堀　それ嬉しいですね。

○岩間　そうですね。もう飛び跳ねて喜ぶようなことですね。それをやってみて、やっぱり実際に輪が出てきたときの強みということもすごくわかったし、無理なことを無理ということは大事かななんて思いました。

○堀　私、無理ですって言うことは、相手を信頼していると

いうことでもありますよね。
○岩間　はい、もちろんです。

○堀　佐々木さん、子どもたちをどう引っ張るかが課題だと庄子さんが言われていたので、子どもたちを引っ張るためには、こんなことを考えていただきたいというのが何かあれば。

○佐々木　青葉通をよく子どもたちと歩いたりするんですけれども、うちの子たちは本当に小さい頃から土に触れたり、水に触れたりして自由に遊ぶ中で育っています。青葉通をちょっと歩くにもすごい時間がかかるんですね。枝を拾って遊んだり、落ち葉をたくさん集めて上に投げてみたり。親という立場からすると、それはちょっとやめてほしいというようなこともどんどん遊びにしていくのが子どもたちなのかなと思っていまして、大人に必要なのが環境づくりをしてあげることかと思います。

○堀　不破さん、庄子さんは“まちを知ることで、お互いが理解できる”というお話だったじゃないですか。まさに不破さんのやっておられるお仕事ってまちを理解することそのものですよね。ぱっと見で見えているものから空間とか、その奥に潜んでいる使い方とか歴史とか文化とか、そういうのを掘り起こしてまちを理解するということですね。そういう不破さんがやられている得意な観点から、今の庄子さんの取り組みだとか、あるいはお二方が言われた市民を巻き込んだ運動というのに何かアドバイスがあれば、お願いできればと思うんですけれども。

○不破　実は堀先生の今日の講演の前にランチミーティングがあったじゃないですか、ランチミーティングがそのままパネルディスカッションになったらいいのにと思っていたんですけれども、そのときに皆さんの活動を聞いたりとか、皆さんのお人柄を見て、何となくですけれども、ほんの数分でしたけれども、こういう人たちだと、その人たちの周りに人が集まるんだろうかなとまず１つ思って。だから、やっぱりコアになる人というのがまず必要なんだろうなと思うことと、それは今、人とあえて言いましたけれども、実はコアになる物という視点もやっぱり重要で、それは物と事というのが当然、一緒になるんですけれども、そのときに、庄子さんがいらっしゃって藤崎というデパートの関係者がここにいらっしゃるということが重要だなと僕は思っています。

○堀　コアになる人・モノも重要ですが、コアになる空間、小さい空間、これが非常に重要ですよね。
　ちょっと視点を変えて話をしたいと思うのですが、岩間さんのハンモックで定禅寺通で寝てみよという、見慣れた空間に違う使い方を提案、すごく面白かったです。そういうことによって、改めて違う角度から、自分が知っていると思い込んでいるまちの新しい顔が見えてくるということがあると思うんですね。こういう発想、すごく面白いと思うんですけれども、これからどんなふうにこういうのを広げていこうとされていますか。

○岩間　仙台のまちを公共空間も含めて既にある空間を見直してみようと推進されている活動、仙台リノベーションまちづくりというものなんでけれども、そこを中心に面白いこと好きな若者が集まってきています。

東京から仙台に来た実感なんですけれども仙台はそういう活動が多いと思っています。東京で働いていると、深夜まで普通に仕事というのが当たり前なので余暇活動とかする余裕がないんですね。だけど、仙台に来て感じたのは、１９時以降になったら、もう皆さん、飲んでいる人も多いし、余った時間をＤＩＹ活動しようという時間に充てている人とか、いろんな市民活動をしている方が多いなということに気づきました。それがもっと表に出てくれば、それを例えば定禅寺通に集合させるだけでもすごく豊かな空間になるんじゃないかと思っていて、そんなことを今、夢見ています。

○堀　前の講演の中でもソフトの演出が極めて重要なんだと話しました。もちろん、ハードとソフトの演出が光輝くようにつくられていないと、せっかくやった皆さんのソフトが十分うまくいかないんですよというお話をしましたけれども、まさに仙台は、東京の我々から見てもインフラ、しっかりしているじゃないですか。だからこそ岩間さんの活動なんかが生きるのかなと思うんですね。庄子さん、いかがですか。

○庄子　緑の鬱蒼（うっそう）としている青葉通で、普段と違う体験ができればすごくいい場所になるんですよね。オープンカフェとかをやれば、岩間さんおっしゃったように、夕方から繰り出してビールを飲むとか、市民の方々がまちに出て来ると思うんですね。そういうところに対して、プレミアムフライデーなどを利用して機会を作れば人は集まるんじゃないかなと思っています。

○堀　佐々木さん、子どもも市民ですから子どもも積極的にまちづくりに参加する資格を持っているわけですよね。こういうふうにしてくれると、子連れでも、子どもを連れても行きやすいなとか、そういうことがあればいかがでしょうか。

○佐々木　ベビーカーで動いていますので、困るのは段差や歩道橋です。

子どものまちづくり活動の参加については、大人が楽しんでいる姿を見せるという事がすごく大きいと思います。子どもたちにこれやりなさい、あれやりなさいと言うのではなく、大人たちが何かをつくっていると、「何つくっているの？」と入ってきたりとか、岩間さんのようにちょっとずつ大人がやりたいことをやるとか。周りに輝く大人がいるということは、子どもたちにとって、何かまちに面白いものがあるんじゃないかというふうに思うきっかけになると思います。

○堀　不破さんの研究は、今あるものを調査することで、まちをさらに理解し、価値を見出していく、ということだったかと思うのですが、定禅寺通のようなところで、不破先生の研究手法を使うとしたら、どんなふうにやられますか。

○不破　子どものまちづくりへの参加という話も出ていましたので、子どもや地域を巻き込みながら行える“地図づくり”という手法は有効かなと思っています。一緒にまちを歩いて写真撮って絵にすればいいだけなので、子どもも巻き込みやすいですし、きれいで立派なものをつくろうとせずに、地図づくりをすることでまちを理解するみたいな事ができると良いと思いました。あとは、子どもと大人が遊べる仕組みを考えることも良いと思っています。

○堀　庄子さん、子どものまちづくり参加について、何かございますか。

○庄子　マンションにお住まいになっているお子さんがどんどん増えてきています。お子さんたちにまちづくり参加してもらう為に、大人が楽しんでいる姿を横で見せるというお話を聞いていてそうだなと思いました。大人が楽しくないと子どもは楽しくないはずなんで、年齢の分け隔てのないような活動をしていく必要があるんじゃないかなとは思います。

○堀　ありがとうございました。

まちを楽しむ、私たちが暮らしているまちで人生を過ごすときに、楽しくないのは困りますよね、楽しくなきゃいけない。楽しくまちで生活するためには、楽しさが体験できる場所、そこのソフト、いろいろなイベントとか使い方とか、そういうのがなければいけません。逆に言うと、楽しい使い方ができるようにまちをつくってもらわないと、楽しく使えないということもありますね。大人が楽しんでいれば、自然と子どもも楽しいまちだなと。将来、仮に仙台に住まなくても楽しいまちで過ごしたなという思い出、必ず醸成されますよね。それが自分のアイデンティーになっていくと思うんですね。

私が今日感心したのは、一人一人の取り組み、お話しされていることは当然、全員違いましたけれども、仙台のまちを愛して愛着を持って理解し、そこをどうやって楽しんでいくか。自分が楽しいということをどうやってほかの人も巻き込んでいくかというさまざまな取り組みの紹介がありました。いずれもうまい取り組みといいますか、理に適った方法だと思うんですね。

問題は、これからそれを自分たちが楽しむということから、なるべくほかの人を巻き込んで仙台市民に広げていって、何かあいつら変なことやっているじゃなくて、共感を得られるようにしていっていただきたいと思うんですね。

そのときにやっぱり大事なのは、講演でもお話ししましたように、ホスピタリティーというのがものすごい重要な概念で、ほかの人に胸襟を開いてあなたもいらっしゃいと、ちょっと閉鎖的になっちゃうと変な人が何かやっているというふうになっちゃうんで、ぜひホスピタリティー、誘うということと丁寧にということをやって磨いていっていただければと思います。

あっという間に時間が過ぎてしまいました。今日、４人のパネリストの皆さん、大変いいお話をいただきましたので、４人の方に拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

では、これで本日のパネルディスカッションをお終りにしたいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

※本記録にあります記載内容及び写真について許可なく引用することを禁じます。